「高知の授業の未来を創る」推進プロジェクト　～いつでも、どこでも、誰でもが学べる場へ～

国語　授業づくり講座 in 香南市立香我美中学校

授業をアップデート！
生きて働く学びを創る！

令和６年３月発行
東部教育事務所

東部管内の講座情報

提　案　授　業

単　元　名　「走れメロス」を読み、物語の展開にとって重要な言動について考えたことを話し合おう。
～登場人物の言動の意味を考えて内容を解釈しよう～

単元の目標

・情報と情報との関係の様々な表し方を理解し使うことができる。　〔知識及び技能〕（２）イ
・登場人物の言動の意味などについて考えて、内容を解釈することができる。　〔思考力、判断力、表現力等〕Ｃ（１）イ
・言葉がもつ価値を認識するとともに、読書を生活に役立て、我が国の言語文化を大切にして、思いや考えを伝え合おうとする。　〔学びに向かう力、人間性等〕

言語活動　「走れメロス」を読み、考えたことを話し合う。～登場人物の言動の意味を考えて内容を解釈する～
（関連：〔思考力、判断力、表現力等〕Ｃ（２）イ）

学　習　材　「走れメロス」　『国語２』（光村図書）

教材研究会　１１月29日

単元における学習課題　作品を魅力的にしているのはどの登場人物か。

単元ゴールで目指す生徒の姿

『走れメロス』を魅力的にしている登場人物はディオニスだと考える。

冒頭では、孤独であることを理由に人を疑うことを正当化していたディオニスが、最後は「おまえらは、わしの心に勝ったのだ。真実とは、決して空虚な妄想ではなかった。どうか、わしも仲間に入れてくれまいか。」と、自分の考えを大きく改める。メロスがセリヌンティウスのために約束を守るだけでなく、最後にディオニスの心が大きく変わることで、「正義」、「真実」といったものがより引き立ってくるのではないだろうか。

また、村から王城に戻る途中、「さては、王の命令で、ここで私を待ち伏せしていたのだな。」「まさしく王の思うつぼだぞ」「王は私に、ちょっと遅れて来い、と耳打ちした。」と所々でメロスの信念を揺さぶる存在として登場する。このような困難に打ち勝ち、弱さを克服していくことで、メロスは少しずつ成長をしていく。主人公の成長に欠かせない存在が、ディオニスである。

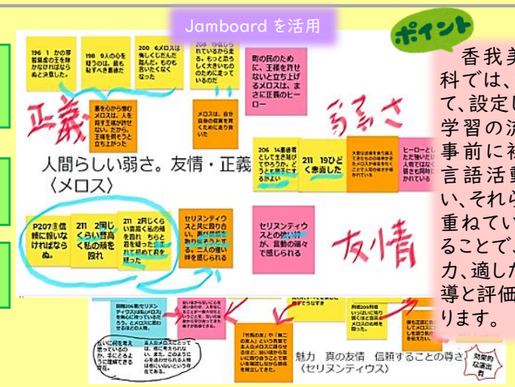
さらに、最後の場面で「万歳、王様万歳。」と群衆から歓声が起こることから、元々は民から支持されていた人物であると考えられる。威厳があり、民からも支持されていたディオニスがなぜ暴君になってしまったのか。最後にもう一度「真実」とは一体何なのか考えさせられる。

つまり、ディオニスの登場によって、「正義」「真実」といったものが引き立ってくるのではないだろうか。

ディオニスの言動から

メロスの言動から

群衆の言動から



ポイント

香我美中学校国語科では、教科会において、設定した学習課題、学習の流れに沿って、事前に複数の教員が言語活動を何度も行い、それらを基に協議を重ねていました。そうすることで、付けさせたい力、適した言語活動、指導と評価等が明確になります。

協議の視点　本単元で付けさせたい力を育成するために、単元や本時の「指導と評価」をどのように工夫するとよいか。
子どもが言葉による見方・考え方を働かせながら、主体的に学ぶことができる単元になっているか。

- ✎ 注目する人物を生徒に自己選択させることで、生徒が文章を読む視点を決めて主体的に読み込むことができる。
- ✎ 生徒が自分に合った学習ツールを選択できるようになっている。
- ✎ 作品を魅力的にしている登場人物という学習課題は生徒にとって難しい。
- ✎ 生徒の実態をよく考えて単元を構成しているが、違う登場人物を選択した生徒同士で比較することで、内容の解釈が進むのではないか。

講師　文部科学省　鈴木　太郎　教科調査官　講話より

ポイント

国語科において

☆　資質・能力を効果的に育成する言語活動を創意工夫して指導する必要があるが、言語活動を行うことが目標ではない。資質・能力を育成することを目指しているので、言語活動でどのように資質・能力を育成することができたのかを教師がきちんと評価し、子ども自身も自己評価し自覚することが重要である。

☆　生徒が言語活動に取り組めるようにするためには、教師の指導改善、生徒の学習改善が必要である。生徒自身が、できていないということを自覚することが中学生段階では非常に重要である。生徒自身が気付くことができれば、ある程度自分たちで修正するだけの力やメタ認知の能力が育ってきている。教師が全て示すのではなく、生徒のエラーモデル等を使いフィードバックを適切に返すなど、生徒自身が改善点に気付き、自分で改善していく力を育成することができる生徒主体の授業をつくっていかなければならない。

ポイント

本単元において

☆　生徒が登場人物の言動の意味などについて考えることができているか、そういった知識・技能のようなものを身に付け、活用して読む力が兼ね備わるようにすることが重要である。

☆　展開と絡めて登場人物の言動を意味付けていく力を発揮できる問いを設定することが重要である。今回設定している問いは複雑な思考が求められるため、生徒にとってハードルが高い。「話の展開にとって重要だと考える言動を挙げる」、「その言動が話の展開にどのように関わっているのかを説明できる」という２つの条件を満たしていれば一定Ｂ規準に達したと判断することができる。規準に達しない生徒に対しては手立てを取っていくことが必要である。

授業研究会　１月30日

教材研究会後の変更点等

単元ゴールで目指す生徒の姿

「走れメロス」の中で、物語の展開にとって重要な言動は、ディオニスが最後に言った「おまえらの望みはかなったぞ。おまえらは、わしの心に勝ったのだ。信実とは、決して空虚な妄想ではなかった。どうか、わしも仲間に入れてくれまいか。」だと思う。物語の冒頭では、「おまえなどには、わしの孤独の心がわからぬ。」「疑うのが正当の心構えなのだと、わしに教えてくれたのは、おまえたちだ。」と、孤独であることを理由に人を疑うことを正当化していたディオニスが、自分の考えを大きく改めたことが、この言葉から読み取れる。ディオニスの心が大きく変わることで、この物語に描かれている「正義」「信実」といったものがより引き立ってくるので、この言動が重要だと考えた。

黄色マーカー部：重要な言動
水色マーカー部：言動の意味

ディオニスの言動

言動の意味

○単元における学習課題：「物語の展開にとって最も重要な言動はどれか」
○単元で目指す生徒の姿（左四角枠囲み内）
育成を目指す資質・能力と学習課題の変更を踏まえ、再検討する。
生徒にも言動と言動の意味を色分けさせて思考を整理させる。
○第３時において、既習教材（「盆土産」）を用いて、見方・考え方（言動の意味）について確認を行う。
○第４時において、エラーモデルを共有し、生徒の学習改善を促す。
○第５時（本時）における交流について、精査・解釈のための交流となるように交流の目的を明確にする。

協議の視点：付けたい力を育成する「指導と評価」になっていたか。
自分の考えと他者の考えを言動の意味に着目しながら比較し、考えを再構築しようとしているか。

- ✎ 話合いで、自分が取り上げた言動が物語の展開と関わっているのかということに疑問をもち、再考することができていた。
- ✎ Jamboard 内に各生徒のシートがあり、必要に応じて参照できる環境になっていた。
- ✎ Jamboard の付箋内の記述に対して、教員がフィードバックすることで、生徒は、自分の読み違いに気付くことができていた。
- ✎ 話合いに入る前に、「どのような情報を手に入れたいのか」、「○○について考えたい」など、話合いの目的や見通しを生徒自身にもたせるようにすることが必要である。
- ✎ 評価場面が明確でなかった。生徒が資質・能力の獲得に向けて、粘り強さを発揮したり試行錯誤したりしている姿をどのように評価するかについて明確な評価計画を立てておく必要がある。

アンケートより

教材研究会

- 授業で全員がＢ評価以上になるように、学習指導要領に忠実に授業を構成していくべきだと再確認できた。
- 単元ゴールで目指す生徒の姿を教師が明確にしておき、生徒の実態に即して常に付けさせたい力に立ち返りながら授業づくり、授業実践を行う必要があることを再確認した。
- 各種調査等の分析では、誤答の類型ごとに手立てを考えていきたい。授業では、エラーモデルを提示し、自分の考えと比較させるなど、生徒が主体的に思考できる授業展開を考えていきたい。

授業研究会

- 生徒同士が主体的に話合いを発展させていくなかで、比較や他者評価を通じて思考のブラッシュアップを進める過程を見ることができ、自身の授業実践に取り入れたいと考えた。
- 指導と評価が常に連動していることや、指導と評価が一体となればその後の指導と評価を更によいものへと改善していけるということが理解できた。
- ICT を活用することで他者参照することができ、自分の考えを広げたり確かなものにしたりすることができるので、大変有効な方法だと思うと同時に、学習のめあてを達成するためのより効果的な活用方法についても研究していく必要があると感じた。

香我美中学校国語科

授業者
宮崎　あい　教諭

講座を振り返っての一番の感想は、「本当に楽しかった！」です。校内での検討会では、他教科の先生方から意見をたくさんいただき、学習の展開や手立て等を改善していくことができました。

教材研究会では、鈴木先生から「単元構想の際に考えるのは、子どもたちの資質・能力が発揮されるようなものにする」ことで、それを考えると「ハードルが高い」というアドバイスいただきました。当初、何だか新しくて、難しいことをしなくてはということで私の頭の中はいっぱいになっていたのですが、鈴木先生のお話を聞き視界が開けました。また、「フィードバックを適切に行うこと」をこの授業づくり講座のなかでも最後まで大切にしてきました。どのような工夫をすれば、よりよく生徒に評価を返すことができるのか、生徒の力につながるのかを考えて授業研究会に臨みました。本時だけではなく単元を通して、生徒へのフィードバックを行うことで、記述等が大きく改善された生徒も見られました。

今後も、適切なタイミングで良い手立て、フィードバックを行うことを実践していこうと思います。

一年間の授業づくり講座を通して、育成する資質・能力を明確にし、生徒の姿を具体化して授業をつくることの重要性を改めて感じました。また、教科会や教材研究会、授業研究会で何度も協議するなかで、自分一人では見えなかった言語活動の工夫、指導と評価の改善点に気付くことができました。今後も、一人一人の子どもの学力向上のために、生徒が学びの主体となり、資質・能力が育成される授業づくりを行っていきたいです。

教科主任
松下　浩子　教諭